

ソーシャル・サポートが大学運動選手の 運動部活動に対する適応感形成に与える影響

土屋 裕 睦・桂 和 仁・中 込 四 郎

**The promoting effect of social support on
varsity athletes' feelings of adjustment to their sport activities.**

TSUCHIYA Hironobu, KATSURA Kazuhito, NAKAGOMI Shiro

The purpose of this study was to examine the promoting effect of social support on varsity athletes' feelings of adjustment to their sport activities. Subjects for this study were 325 varsity athletes. We identified their feelings of adjustment to their sport activities by using Adjustment Scale for School Athletic Clubs-Short version (ASSAC-SR) and assessed their received and perceived social support by using Athletic Social Support Scale-Revised version (ASSS-REV) composed of scales for emotional support, instrumental support, instructive support and companionship support.

We found some differences between the athletes showing positive feelings of adjustment and those who showing negative feelings of adjustment in perceiving these kinds of social support and in types of others as resources of the support. We concluded that social support have a promoting effect on feelings of adjustment to their sport activities and discussed how to provide athletes with social support effectively.

Key words : feeling of adjustment, social support, varsity athletes.

緒言および目的

本研究の関心は、大学運動選手の精神的健康、特に運動部活動に対する適応感形成に寄与するソーシャル・サポートの活用法を探究し、実践的介入に向けた基礎資料を得ることにある。

ソーシャル・サポートは、「ある人を取り巻く重要な他者から得られる様々な形の援助」と定義される⁶⁾。最近では特に、ソーシャル・サポートの先駆的研究²⁻³⁾以来主張されてきた、ストレス緩和効果に対する実証的裏付け^{1,4)}や、説明のための理論の整備^{5,12,21)}が活発になされている。その結果、これまでソーシャル・サポートの査定に用いられてきた種々の側面、即ち、実際にやり取りされたサポート(enacted support)の内容や頻度、あるいはサポートネットワーク(support network)の広がりや密度ではなく、サポートに

対する受け手の認知や解釈が、ストレス緩和効果を産み出す重要な要因であることが明らかになっている。さらに、その中でも特に、知覚されたサポート(perceived support)、すなわちサポートの利用可能性に対する受け手の評価が、社会的資源を含む当該個人のストレス対処能力を高め、結果として心理的適応感の形成に大きく寄与すると考えられている⁷⁾。

ところで、岸・中込(1989)や土屋(1989)の報告するバーナウト問題^{10,17)}のように、運動選手を対象とした心理的不適応に関する事例は多く、競技現場からは、その予防に向けた指針の提示が要請されている。また、競技成績の向上を標榜する競技集団においても、チームワークの向上に寄与する介入方略が模索されている¹⁴⁾。さらに、桂・中込(1990a, b)は、大学運動選手にお

ける運動部活動への適応感形成に関わる問題について検討し、現在の環境におけるチームメイトや指導者といった対人的要因が、重要な役割を果たすことを見出ししてきた。そして、対人要因に含まれる社会的資源には、どのような機能が存在し、それが適応感形成にどのような影響をもたらすかを検討する必要がある、と主張している⁸⁻⁹⁾。いずれの立場から、運動選手を対象としたソーシャル・サポート研究の意義・重要性が主張されている。

しかしながら、特に米国の社会心理学および対人関係を扱う関連領域を中心に展開されている研究と比較すると、我が国のスポーツ心理学領域におけるソーシャル・サポート研究の蓄積は非常に乏しい。既存の尺度を運動選手に適用し、その一般的な特徴を捉えようとする試みはいくつか見られるが、上述の意義や重要性を視野に入れ、運動選手の精神的健康あるいは心理的適応の維持・増進に寄与するソーシャル・サポートの活用方法を旨とする研究は、これまでほとんどなされていないのが現状である。

そこで本研究では、「誰から得られた」「どの種の」サポートが部員の運動部活動に対する適応感形成に影響を与えるのかを検討する。その際、先行研究¹⁸⁻¹⁹⁾を踏まえながら、さらに受け手のサポート利用可能性に対する評価を査定できる、より精度の高い尺度を活用することで、実践的介入に向けた基礎資料が得られると考えられる。

方法

国立T大学、私立M短期大学および私立T大学の体育会運動部に所属する325名の大学運動選手(男子195名、女子130名)を対象者として、平成5年11月上旬から12月上旬にかけて質問紙調査を行った。質問紙は、フェースシート他に、以下の調査用紙あるいは尺度を含んでいた。

- (1)「運動部活動における適応感評定尺度」短縮版
桂・中込(1990b)が作成した「運動部活動における適応感評定尺度」(Adjustment Scale for School Athletic Club, 以下ASSACとする)⁹⁾より、各下位尺度の意味内容を代表する項目を選び、「今の部に入ってから、これまでの私の部での生活は、全体としてうまくいっている」など、18項目からなる適応感尺度(以下ASSAC短縮版とする)を構成した。回答は、「非常にそう思う」か

ら「全然そう思わない」までの7件法で求めた。

- (2)「運動部員用心理的距離地図」

Wapner(1978)のPDM(Psychological Distance Map)²²⁾をもとに、桂・中込(1990a)が開発した「運動部員用心理的距離地図」(以下PDM修正版とする)⁸⁾を使用した。この調査では、白地図中央に自分を示す印が記されており、「現在の部の仲間(先輩・後輩を含む)」(以下「部員」とする)、「現在の部の指導者(監督、コーチなど)」(以下「指導者」とする)、「大学入学後、知り合った所属運動部以外の人」(以下「入学後知人」とする)、「入学以前からの知り合い」(以下「入学前知人」とする)の各属性にあたる重要な他者1名を、身近に感じている程度が高い程、自分の近くに○印で記入させる形式の調査用紙である。

- (3)「ソーシャル・サポート尺度」

土屋・中込(1994a)が開発した、「競技者用ソーシャル・サポート尺度」(Athletic Social Support Scale, 以下ASSSとする)¹⁸⁾に示されたサポート行動のタイプをさらに豊富にし、かつ項目を精選する目的で、新たに自由記述方式の予備調査を行い、そこで得られた結果より、暫定的に10項目からなるASSS改訂版を構成した^{注)}。回答は、前述のPDM修正版に示された重要な他者、即ち「部員」「指導者」「入学後知人」「入学前知人」より「これまで実際に受けたサポートの程度」(以下サポート享受度とする)と「これから受けることが期待できるサポートの程度」(以下サポート期待度とする)の2側面について、それぞれ「必要なときはいつもそうしてくれた」「今後、必要なときはいつもそうしてくれると思う」から「全くそんなことはしてくれなかった」「今後、全くそんなことはしてくれないと思う」までの5件法で回答を求めた。

結果

1. サポート構成要素の検討

サポート享受度と期待度得点について、主成分分析(バリマックス回転)を施し、固有値の変動状況、説明率および因子の解釈可能性を考慮したうえで、3因子までを抽出した。表1には、回転後の各項目における因子負荷量、共通性および各因子の寄与率を示した。それぞれの因子に.50以上の高い負荷量を示した項目の意味内容を参考に、因子の解釈を行ったところ、予め想定した因

表1 回転後の因子負荷行列

番号	質問項目	F1	F2	F3	共通性	想定された下位尺度
10	あなたの立場や生き方を尊重してくれることに関して	.839	.280	.150	.805	情緒的サポート
6	心の支えになってくれることに関して	.772	.350	.272	.792	
1	悩みごとを聞いてくれたり、落ち込んでいるとき励ましてくれることに関して	.725	.301	.366	.750	
7	練習の効率を高めたり、試合で実力を発揮できるように考えてくれることに関して	.158	.862	.177	.799	技術的サポート
5	あなたのことを思っ、プレイや記録に対して評価や叱責、激励してくれることに関して	.324	.815	.112	.782	
2	適切な技術的アドバイスをしてくれることに関して	.198	.803	.231	.737	
3	必要なものをくれたり、貸してくれることに関して	.408	.159	.749	.753	道具的サポート
8	仕事などを手伝ってくれることに関して(仕事; 部や研究室での作業など)	.199	.437	.729	.762	
4	部の活動以外でも遊びや買い物、飲食などにつき合ってくれることに関して	.621	.120	.610	.772	娯楽関連サポート
9	部の活動とは直接関係のない共通の趣味や関心を示してくれることに関して	.715	.106	.522	.795	
因子寄与率		3.098	2.585	2.065	6.008	

表2 各サポート得点の平均値と標準偏差

	サポート享受度					サポート期待度				
	高適応群 (n=83)		低適応群 (n=78)		t 値	高適応群 (n=83)		低適応群 (n=78)		t 値
	M	SD	M	SD		M	SD	M	SD	
情緒	40.61	7.69	37.21	7.83	2.79 **	42.84	7.43	38.50	7.61	3.66 **
技術	39.96	7.95	36.13	7.21	3.20 **	39.37	7.60	35.54	8.05	3.11 **
道具	24.94	4.84	24.05	5.60	1.08 n.s.	25.93	5.39	24.31	5.57	1.88 †
娯楽	25.92	5.09	24.15	5.05	2.20 *	26.60	5.10	24.49	4.92	2.68 **

**p<.01, *p<.05, †.05<p<.10

子構造に対応して、それぞれ第1因子は情緒的サポート、第2因子は技術的サポート、第3因子は道具的サポートと命名できた。娯楽関連サポートと想定された項目は、第1因子と第3因子に対する負荷量がともに高く、独立した因子として抽出されなかった。なお、この3因子が説明する分散は、全体の60.08%であった。

2. サポート享受度と期待度の関連

サポート享受度と期待度の関連を、ピアソンの積率相関係数(以下相関係数と呼ぶ)を求めることにより検討した。その結果、「入学前知人」からの技術的サポートに中程度の相関(r = .495, p < .01)が認められた以外は、r = .775 ~ .919(すべて p < .01)と強い正の相関係数が示された。

3. サポート享受度、期待度と適応感との関連

適応感得点の上位・下位25%に相当する調査対

象者をそれぞれ高適応群(n = 83)、低適応群(n = 78)とし、各サポート内容別にサポート得点(サポート享受度得点・期待度得点)の平均値を比較した。その結果、道具的サポートを除くすべてのサポートの得点について、高適応群の得点が有意に高いことが示された。なお、各サポート得点の平均値、標準偏差とt値を表2に示した。さらに、適応要因(高適応群と低適応群の2水準)×サポート要因(サポート享受度と期待度の2水準)の混合計画による2要因分散分析を行ったところ、各要因の主効果が有意であり(それぞれ F(1, 159) = 10.20, 6.85, ともに p < .01), いずれのサポート得点も高適応群の方が高く、またサポート享受度よりもその期待度の方が高く評価されていることが分かった。

同様の分析を各サポート提供者毎に行った結

果、「指導者」からの情緒サポート、道具サポート、娯楽関連サポートについて、交互作用が有意であった（それぞれ $F(1, 159) = 4.28, p < .05, F(1, 159) = 4.30, p < .05, F(1, 159) = 10.40, p < .01$ ）。この結果より、適応感形成には、サポート享受度よりも期待度の評価の方が大きく寄与することが示唆された。なお図1には、娯楽関連サポート得点の比較を示した。

サポートと適応感との関連は有意な正の相関係数（全体で $r = .156, p < .01$ ）からも確認できたが、調査対象者の学年毎に、各提供者から得られた各サポートと適応感との関連を個別に検討した結果、1年生は「部員」からの技術的サポート、2年生では「指導者」からの技術的サポート、3年生では「入学後知人」からの道具的サポートと、適応感との間に $r = .30$ 以上の正の相関係数が示

された（表3参照）。この傾向は、サポート享受度と期待度ともに認められるが、1年生の「指導者」からの各サポートとの関連では、サポート享受度よりも期待度の評価の方が、比較的高い相関係数を示すことが特徴的であった。また、各学年に共通して、「入学前知人」からの道具的サポートでは、サポート享受度と適応感との間に有意な正の相関係数が示された。

4. サポート提供者に対する心理的接近度とサポート享受度、期待度および適応感との関連
まず、PDM 修正版中央の自分を示す印から、サポート提供者を示す○印までの距離をミリ単位で測定し、その実測値の逆数を100倍することで心理的接近度得点を求めた。この心理的接近度得点とサポート得点について相関係数を算出したところ、表4に示す結果を得た。この結果、「部員」

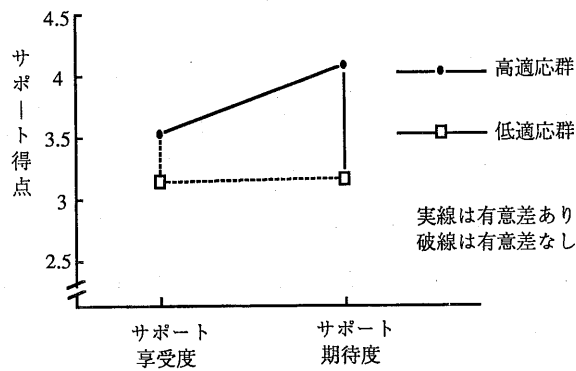


図1 「指導者」からの娯楽関連サポートと適応感との関連

表3 サポートと適応感との相関（学年別の比較）

		サポート享受度				サポート期待度			
		部員	指導者	後知人	前知人	部員	指導者	後知人	前知人
1年生 (n=175)	情緒	.205 **	.190 *	.116	.157 *	.240 *	.282 **	.130	.156 *
	技術	.492 **	.211 **	.037	.157 *	.311 **	.254 **	.086	.033
	道具	.144	.042	.066	.116	.189 *	.144	.108	.111
	娯楽	.088	.115	.099	.179 *	.152 *	.189 *	.113	.081
2年生 (n=82)	情緒	.041	.240 *	.136	.103	.121	.165	.129	.096
	技術	.136	.336 **	.057	.103	.169	.327 **	.041	.089
	道具	.134	.231 *	.103	.274 *	.181	.206	.006	.197
	娯楽	.144	.188	.114	.101	.153	.258 *	.036	.023
3年生 (n=68)	情緒	.118	.088	.269 *	.193	.145	.128	.226	.164
	技術	.031	.073	.240 *	.193	.163	.099	.259 *	.151
	道具	.034	.053	.317 **	.247 *	.056	.008	.335 **	.156
	娯楽	.260 *	.201	.199	.132	.306 *	.068	.286 *	.185

** $p < .01, *p < .05$

注) ただし、後知人は「入学後知人」を、前知人は「入学前知人」を示す

を除くすべての提供者に対する心理的接近度とサポートの享受度・期待度得点との間に、有意な正の相関係数が得られた。しかし、適応感との関連では、「指導者」に対する心理的接近度との間のみ、 $r = .273$ という有意な正の相関が認められた ($p < .01$)。

5. 性差の検討

サポート享受度、期待度と適応感得点の相関係数を、男女別に算出した結果、男子では「部員」からの各種サポート、女子では「指導者」からの各種サポートが適応感と正の関連を示すことが分かった (表5参照)。さらに、先の分析と同様、サポート提供者に対する心理的接近度と適応感得

点との相関係数を求めたところ、女子では「指導者」に対する心理的接近度との間のみ、 $r = .434$ という中程度の正の相関が認められた ($p < .01$)。しかし男子では、「入学後知人」「部員」「指導者」に対する心理的接近度との間に有意な相関が認められたものの、その程度は弱いことが分かった(それぞれ $r = .161, .148, .133, p < .05$)。つまり、男子では「部員」からのサポートが、女子では「指導者」からのサポートが適応感と関連し、さらに女子では、サポートだけでなく、「指導者」に対する心理的接近度も適応感と関連していることが分かった。

表4 サポートと心理的接近度との相関

	サポート享受度				サポート期待度			
	情緒	技術	道具	娯楽	情緒	技術	道具	娯楽
部員	.104	.131*	.003	.039	.059	.095	.033	.001
指導者	.488**	.377**	.294**	.298**	.478**	.400**	.258**	.350**
後知人	.524**	.350**	.421**	.480**	.506**	.315**	.414**	.404**
前知人	.258**	.258**	.210**	.227**	.253**	.162**	.234**	.268**

** $p < .01$, * $p < .05$

注) ただし、後知人は「入学後知人」を、前知人は「入学前知人」を示す

表5 サポートと適応感との相関 (男女の比較)

		サポート享受度				サポート期待度			
		部員	指導者	後知人	前知人	部員	指導者	後知人	前知人
男子 (n=195)	情緒	.197**	.041	.112	.054	.252**	.098	.120	.055
	技術	.222**	.101	.048	.054	.223**	.152*	.049	.043
	道具	.210**	.014	.004	.057	.262**	.054	.039	.009
	娯楽	.183*	.023	.122	.058	.216**	.084	.091	.053
女子 (n=130)	情緒	.130	.340**	.044	.035	.164	.374**	.062	.031
	技術	.203*	.345**	.018	.035	.178*	.343**	.083	.002
	道具	.013	.184*	.067	.010	.027	.240**	.023	.002
	娯楽	.073	.174*	.001	.041	.138	.242**	.035	.061

** $p < .01$, * $p < .05$

注) ただし、後知人は「入学後知人」を、前知人は「入学前知人」を示す

考察

土屋・中込 (1994a) は、ASSS 調査項目収集にあたり、①既存尺度からのサポート内容の抽出、②競技者特有のサポート内容の抽出という2つの作業過程を経た¹⁸⁾。このような探索的な試みから、24項目のサポート行動を示す調査項目を得、その因子的妥当性の確かめもなされた。しかし、今後競技現場でこの尺度を利用していく際には、項目に含まれるサポート内容がより競技者に適した表現で示され、かつ項目数が精選されるよう、適宜修正していくことが課題であった。そのために、本研究における予備調査では、さらに多くの

大学運動選手より調査項目を収集した。既存尺度からの翻訳・修正ではなく、彼ら自身が語る言葉から調査項目を準備し、かつ彼らの多くが報告する内容を積極的に取り上げながらも、調査対象者の負担を軽減する意図から、項目数は10項目とされた。

上記の観点から暫定的に作成された ASSS 改訂版には、浦 (1992) が主張するソーシャル・サポートの2つの構成要素²⁰⁾、即ち問題解決に直接・間接的に介入する道具的サポート2項目と情緒面・認知面に働きかける情緒的サポート3項目が含まれていると想定された。さらに、土屋・中込

(1994a) が、競技者特有のサポートであると位置づけている技術指導に関わるサポート(技術的サポート)¹⁸⁾ 3項目と、娯楽活動の共有や気晴らしなどの娯楽関連サポート2項目も含まれていると想定された。本研究で示された因子構造は、娯楽関連サポートを除き、この想定と概ね対応が確認できたことから、ASSS改訂版は比較的因子的妥当性の高い尺度と言えよう。

娯楽関連サポートと想定された項目は、情緒的サポート因子と道具的サポート因子にそれぞれ高い因子負荷量を示したことから、本研究では独立した因子ではなく、複合因子として扱うことが妥当と考えられる。本来この種のサポート行動を、ソーシャル・サポートの構成要素として取り上げられるかどうかは、研究者間で意見の一致を見ていない¹⁶⁾。例えば、Rook (1987) はこのような行為を、内発的な満足を満たすための相互作用と位置づけ、ソーシャル・サポートとは区別するかたちで、「ソーシャル・コンパニオンシップ」と呼んでいる¹¹⁾。一方、大学生のソーシャル・サポートネットワークの測定を行った嶋(1991)は、「広義のソーシャル・サポートとして考えることができる」という立場から、彼が開発した尺度の構成要素に組み入れている¹⁶⁾。本研究では、「競技者のバーナウト抑制にとって重要なサポート行動である」¹⁹⁾という報告を尊重し、ASSS改訂版でもこの娯楽関連サポートを下位尺度として取り上げることにしたが、その機能は情緒的サポートと道具的サポートの両方の側面を合わせ持つサポートであるという認識が必要であろう。

ところでASSSでは、サポート行動を示す調査項目に対し、Sarason et al. (1983) の Social Support Questionnaire¹³⁾と同様、その満足度に応じて評定を求めている。満足度とは、享受したサポート行動に対して当該個人の行う評価であり、いわゆる「受容されたサポート(received support)」の一側面であった。本研究では、ASSS改訂版の作成にあたり、サポート享受度の他に、その期待度を評価させていた。それは、「知覚されたサポート」(サポートの利用可能性に対する受け手の評価)こそが、当該個人の心理的適応感形成に寄与する要因であるという、社会心理学領域における最近の主張を踏襲したものであった。

当該個人のサポート期待度は、如何に高められ

うるかという問題に対して、過去にサポートを享受したという経験が、今後も享受できるという認知を形成すると仮定することは、ごく妥当なことであろう。この仮定は、サポート享受度と期待度との間の密接な関連より、裏付けられたと考えられる。「入学前知人」からの技術的サポートにおいて、両者の関連を示す相関係数が若干低くなったが、それは、大学入学という環境移行を果たし、入学以前の競技環境における指導者やチームメイトから、物理的にも距離が離れたことによると解釈できるであろう。

サポート享受度と期待度の適応感形成への寄与は、高適応群-低適応群の比較からも明らかであった。また、適応要因とサポート要因の分散分析において、交互作用が認められたことから、「指導者」からのサポートについては、その期待度が適応感形成に大きく寄与していることが明らかとなった。

また、サポートの送り手に注目した分析では、学年によってそれぞれサポート提供者の属性が異なることが示された。そこには各学年に共通する認知的な要因が介在していると考えられる。1年生では、環境移行期に体験する様々な適応上の問題を一緒に解決する「部員」が、2年生では自己の競技目標を達成するための強力なサポート提供者としての「指導者」が、そして3年生では運動部活動を越えた様々な問題を解決するために有効な社会的資源となる「入学後知人」が、それぞれ挙げられたことは興味深い。この結果は、学年によって異なる適応上の課題の存在と、その解決にとって最も有効となる社会的資源の所在を示唆するものと考えられる。

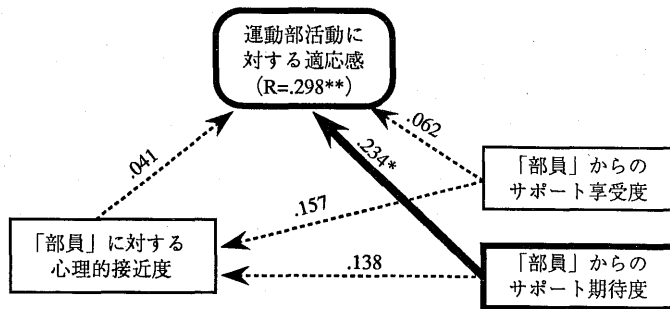
また、1年生では、「指導者」からのサポート享受度よりもその期待度が、適応感形成に寄与するという結果は、先の主張を繰り返すものとなる。入学後8カ月の運動部経験では、サポートを享受したという認知よりも、今後3年以上にわたって享受できるという認知の方が、重要になるようである。なお、各学年に共通して、「入学前知人」からの道具的サポートが適応感形成に関与しているという結果が得られた。これは、両親からの経済的な支援(例えば仕送りなど)が反映されているものと考えられる。

サポート提供者に対する心理的接近度は、サポートに対する認知と所属運動部への適応感形成

との間の、介在変数の1つと位置づけられるであろう。サポート享受度、期待度と心理的接近度とは、比較的明確な相関関係が認められ、サポートを享受した、あるいはサポートが享受できるという認知が、サポート提供者への心理的接近度を高めるといふ予測が成り立つ。しかし、「指導者」を除く他の提供者への心理的接近度と適応感との間には、明確な相関関係は認められず、当該個人の属性、あるいは他者との関係の質によって、その影響が変容すると考えられる。この推測を確かめるため、以下では性差との関連から、補足分析ならびに考察を行う。

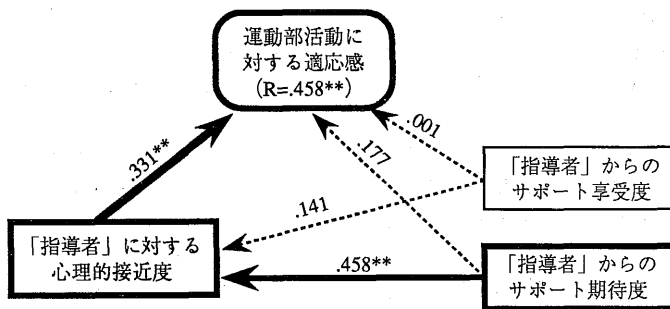
適応感形成に寄与するサポートの送り手について、男子では「部員」、女子では「指導者」という性差による特徴が示された。さらに女子では、

「指導者」に対する心理的接近度も適応感形成に寄与しているようであり、この点は男子には認められない特徴と捉えられるようである。この予測を検証するため、サポートと心理的接近度との関連も考慮しながら、サポート享受度、期待度を第1水準、心理的接近度を第2水準の説明変数、適応感を基準変数とするパスモデルを設定し、男女それぞれ個別にパス解析を行った。その結果、図2、図3に示すパスダイアグラムが得られ、適応感形成に対して男子では「部員」のサポート期待度から有意なパスが、女子では「指導者」に対する心理的接近度を介した、サポート期待度の間接寄与を示すパスが示された。なお、この回帰式の説明率は、男子では8.89%、女子では20.98%であり、この予測の妥当性を主張することができる



図中太線は有意なパスを示す。 * $p < .05$, ** $p < .01$

図2 男子におけるパスダイアグラム



図中太線は有意なパスを示す。 ** $p < .01$

図3 女子におけるパスダイアグラム

と考えられる。

「男性は活動のパートナーを求めるのに対し、女性は親密な腹心の友 (confidant), 同じ感情を共有する友を求める」という Sherrod (1989) の報告¹⁵⁾を参照すると、この結果は以下のように説明できるであろう。女子では「指導者」から享受した、ほとんどすべてのタイプのサポートを好意的に、かつ感情の付与を強めて解釈し、その結果「指導者」に対する心理的接近度を高めることとなる。そして心理的接近度の高まった関係においてさらなるサポートを享受することで、適応感はいっそう高められていく。一方男子は女子に比較すると、「指導者」のサポートを彼らの役割行動からもたらされるものと捉え、むしろ適応感形成に寄与するのは、実質上係わりの多い「部員」からのサポートとなる。しかし、「部員」との係わりにおいても、女子が「指導者」に対して持つような好意的・直情的な認知は生まれにくい。この性差に関する推測には、「指導者」の多くが男性であり、女子にとっては異性であるという条件を考慮に入れて解釈しなければならないであろう。

結 論

本研究では、サポートの二側面 (サポート享受度と期待度) を査定する ASSS 改訂版が作成された。ASSS 改訂版は、比較的安定した因子構造を持つ尺度であり、また ASSS に比べると項目が精選され、かつ表現が適切に修正されたことから、今後競技現場で活用されることが期待される。本研究ではこの尺度を用い、ソーシャル・サポートの諸側面が、大学運動選手の運動部活動における適応感形成に与える影響を検討したところ、結論として以下のような知見を得た。

- (1) ソーシャル・サポートを享受したという経験が、その期待度の評価に影響を及ぼすという示唆が得られ、それらが適応感形成に寄与するという結論を得た。特に、サポート提供者として指導者やコーチに注目した場合、サポート享受度よりもその期待度の方が、適応感形成に対する予測に有効であるという仮説が支持された。
- (2) サポート提供者について学年と性別による差異が認められた。また、当該個人の適応上の課題にとって、有効に機能するサポートの

所在が示唆された。

- (3) 各種サポートは心理的接近度の高進と適応感の形成に寄与するが、そのプロセスには性差が認められ、男子では部の仲間によるサポートからの直接寄与が、女子では指導者やコーチに対する心理的接近度を介した間接寄与が確認できた。

以上の知見を踏まえ、今後は ASSS 改訂版の信頼性、妥当性の検討と、さらに詳細な調査・分析が必要となった。

注

注) 予備調査は、国立 T 大学と私立 M 短期大学の体育会運動部に所属する大学運動選手 152 名に対し、自由記述方式の調査用紙に回答を求めた。この調査用紙では、「これまで以下の人たちが行った行動の中で、あなた自身が援助 (サポート) され助かったと思える行動、あるいはうれしく思った行動を自由に記入してください」と問いかけ、「部員」「指導者」「入学後知人」「入学前知人」のそれぞれについて個別に記入を要請した。

そこで得られた回答を、その意味内容により分類、整理した結果、比較的多くの調査対象者が報告するサポート行動 10 項目が抽出された。この 10 項目の想定は、ソーシャル・サポートの基本的な構成要素である道具的サポートと情緒的サポートが計 5 項目、大学運動選手を対象とした先行研究¹⁶⁾においてその重要性が指摘された娯楽関連サポートと技術サポートが計 5 項目含まれるというものであった。

参考文献

- 1) Barrera MJr & Ainlay SL (1983) : The structure of social support : A conceptual and empirical analysis. *Journal of Community Psychology*, 11 : 133-143.
- 2) Caplan G (1974) : *Support systems and community mental health*. New York, Behavioral Publications.
- 3) Cassel J (1974) : Psychological processes and "stress" : Theoretical formulations. *International Journal of Health Service*, 4 : 471-482.
- 4) Cobb S (1976) : Social support as a moderator of life stress. *Psychosomatic*

- Medicine, 38 : 310-357.
- 5) Cohen S & Wills TA (1985) : Stress, social support, and the buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, 98 : 310-357.
 - 6) 久田 満 (1987) : ソーシャルサポート研究の動向と今後の課題. *看護学研究*, 20 : 170-179.
 - 7) 稲葉昭英, 浦光博, 南隆男 (1989) : ソーシャル・サポート研究 : 研究の新しい流れと将来の展望. *社会心理学研究*, 4 : 78-90.
 - 8) 桂和仁, 中込四郎 (1990a) : 運動部活動における適応感評定尺度 (ASST) の妥当性の検討. *いばらき体育・スポーツ科学*, 5 : 13-19.
 - 9) 桂和仁, 中込四郎 (1990b) : 運動部活動における適応感を規定する要因. *体育学研究*, 35-2 : 173-185.
 - 10) 岸順治, 中込四郎 (1989) : 運動選手のバーナウト症候群に関する概念規定の試み. *体育学研究*, 34 : 235-243.
 - 11) Rook KS (1987) : Social support versus companionship : Effects on life stress, loneliness, and evaluations by others. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52 : 1132-1147.
 - 12) Sandler IN, Miller P, Short J & Wolchik SA (1989) : Social support as a protective factor for children in stress. In D. Belle (Ed.) . *Children's social networks and social supports*, New York, John Wiley & Sons : Pp. 272-307.
 - 13) Sarason IG, Levine H, Bashaman R and Sarason BR (1983) : Assessing social support : The social support questionnaire. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44 : 127-139.
 - 14) Sarason IG, Sarason BR and Pierce GR (1990) : Social support, personality, and performance. *Journal of Applied Sport Psychology*, 2 : 117-127.
 - 15) Sherrod D (1989) : The influence of gender on same-sex friendships. In C. Hendrick (Ed.) . *Close relationships*, Newbury Park, CA : Pp. 164-186.
 - 16) 嶋伸宏 (1991) : 大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する一研究. *教育心理学研究*, 39-4 : 76-83.
 - 17) 土屋裕睦 (1989) : 大学運動選手におけるバーナウトの程度を規定する要因の分析. 昭和63年度筑波大学体育研究科修士論文抄録集, 11 : 125-128.
 - 18) 土屋裕睦, 中込四郎 (1994a) : 大学運動選手におけるソーシャル・サポートの構成要素とその機能. *筑波大学体育科学系紀要*, 17 : 133-141.
 - 19) 土屋裕睦, 中込四郎 (1994b) : ソーシャル・サポートのバーナウト抑制効果の検討. *スポーツ心理学研究*, 21-1 : 23-31.
 - 20) 浦 光博 (1992) : 支えあう人と人—ソーシャル・サポートの社会心理学—. サイエンス社.
 - 21) Vaux A (1988) : *Social support : Theory, research, and intervention*. New York, Praeger.
 - 22) Wapner S (1978) : Some critical person-environment transitions. *Hiroshima Forum for Psychology*, 5 : 3-20.

付 記

本研究のデータ収集では、筑波大学教授高橋健夫先生ならびに東北福祉大学助教授柴田幸男先生のご協力を得た。記して感謝の意を表します。なお、本研究の一部は、(財)水野スポーツ振興事業団より研究助成金の交付を受けて行った。